

---

2008年度BMC「病と物語」  
第1回月例会(6月4日)

病と物語 ー  
脳病院患者の手記「痴人の夢物語」(昭  
和12年)を中心に

鈴木晃仁  
(慶應義塾大学)

---

# 「文学と医学」という研究領域

- 雑誌 Literature and Medicine (1982-)
- 1998年にはアメリカの125の医学校のうち93校が「文学と医学」に類する科目を設けている
- イギリスの芸術庁の Arts in Health (2004)
- 「医学の人間化の時代」
- 問診、カンファレンス、論文、治療、闘病記など、多様なナラティブが錯綜する臨床の場
- 人文科学・文学研究にとっての可能性

# 「痴人の夢物語」

- 東京の私立(代用)王子脳病院に昭和12年に入院していた患者Kが入院中に書いた「作品」
- 精神病院での生活の実態などを知る資料であると同時に、精神病患者はどのように、なぜ「作品」を書いたのか、それはどのような意味を持っていたのかを考察できる資料

# 王子脳病院 (OBH)

- 1900年近辺に、東大医学部龍岡門付近で宿屋を営んでいた小峰善次郎が「王子脳病院」を開く
- 秦野の農家の五男で済生会医学舎を卒業した小川茂之を養子として、病院を継がせる — 「立志伝中の人物」
- 小川茂之は1920年に1年間アメリカ留学、23年に東北大学から博士号を取得
- 関東大震災の後、病院を新築、1925年に「小峰研究所」を設立
- 東北大学の丸井清泰を通じてフロイト派精神分析を東京に導入、脳病院に二人の東北大学出身の医者を配する(一人は息子)
- 1925-45年のあいだに、代用(公費)患者を655人、私費患者を6,400人入院させる。
- マラリア療法、電気痙攣療法、インシュリン・ショックなど最新の治療法を取り入れる。



# テキストの成り立ち

- B4わら半紙59枚両面に鉛筆書き
- 「痴人の夢物語」20枚
- 「私の先祖と化身」2枚
- 「患者の種々記」9枚
- 「私の病院生活」4枚 「病院生活日誌の一節と我が83歳の老母」2枚
- 「詠歌」2枚
- 「国民教育(?)に就いて」2枚
- 「六才以後のこと」「父兄在りし頃の正月と祭典」「三大祭典 盂蘭盆会」10枚

# 執筆時期

- 「夢物語」—「9月16日 夜半一時頃記す」
- 「私の病院生活」—「昭和12年9月21日夜半 之を記す 時に雨音あり 稿書きて聞くや夜半の雨音哉」
- 「病院生活日誌」—「昭和十二年9月8日水曜日 晴天 頭身変なし温脈同便通一回」
- 執筆の順番と綴じられている順番は違う
- 綴じている「こより」はカルテを綴じているものと似ている

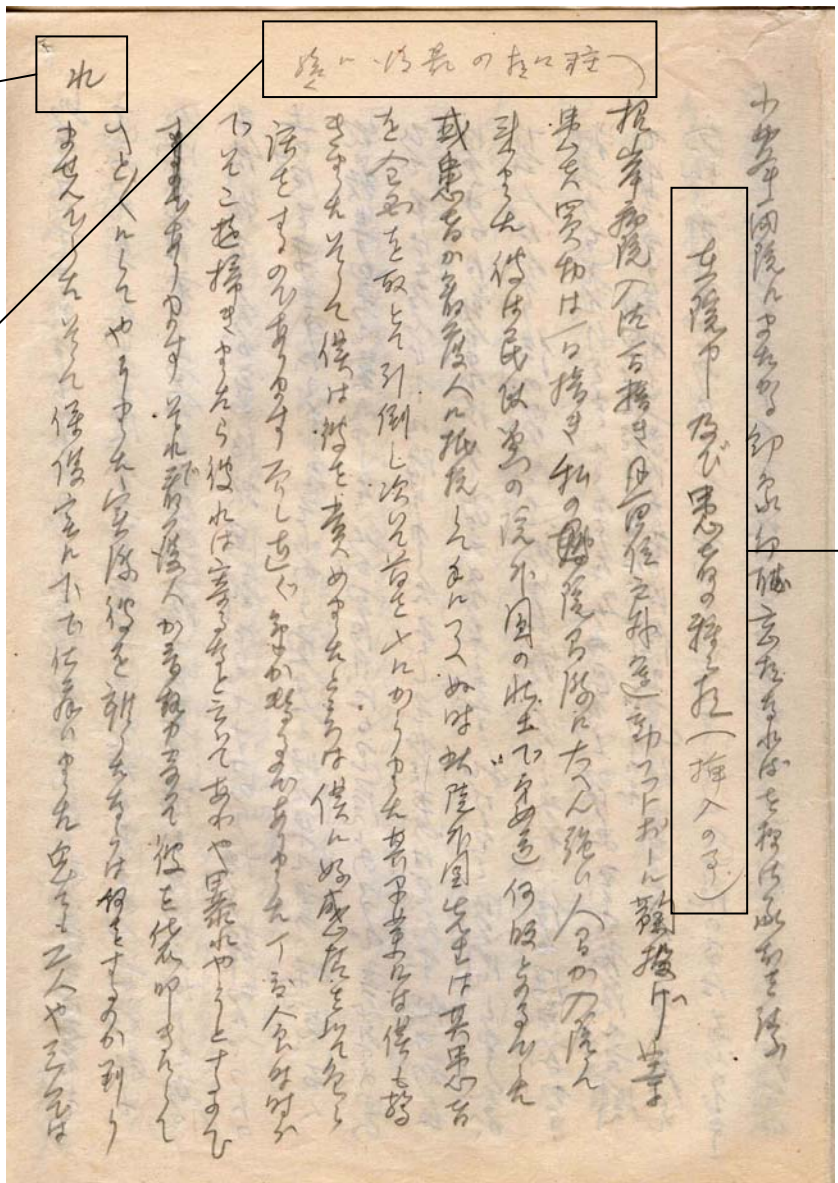
# 「夢物語」の構成

- い、ろ、は・・・「ね」, a, b の順でページ番号が振られ、節に表題が付されている
- 「物語の発端」 — 「帰省」 — 「在所中」 — 「再び東京へ」—「思いもかけぬ入院」
- 「雄大なる幻象[ママ]と幻聴」
- 「幻聴による世界改造 極楽浄土建設 星の世界征服」
- 「在院中及び患者の種々記」(挿入の事)「種々記の最後に続く」「種々記」にはいろはの番号が振られている
- 「覚醒」
- 明確な構成の構想を持ち、かなりの程度まで完成させていた「作品」



# 節の表題 「在院中及び患者の種々記」

(挿入の事)



ページ番号  
「れ」

欄外メモ

「種々記の最後  
に続く」

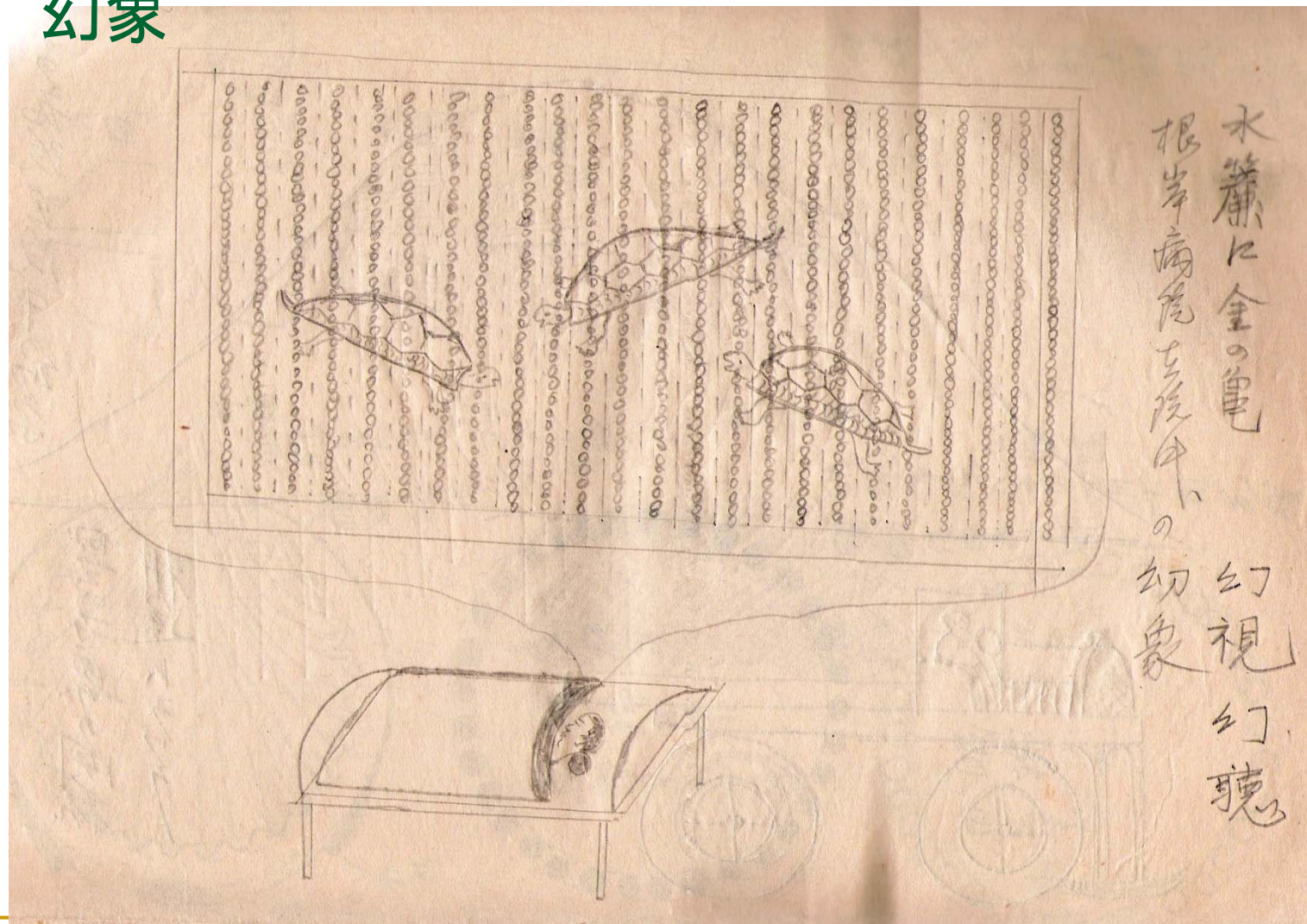
# 発端から入院まで

- 円タク商売の最中、信号をめぐるいざこざで、警官になぐられ留置所に入れられるが、数日で釈放される。「法難」
- 「興奮しているので郷里で静養する」という理由で、妻子とともに亡父の三十三回忌の法要をかねて郷里に帰る。上野一関一船で島へ
- 妹の家に滞在、法事の葉書の印刷や看板をめぐって法外なことをし、家族が止めるといって怒って乱暴を働く。釈迦や日蓮になぞらえて「自分は法難にあう、今は試練である。打て、叩け、うんと苦しめろ」
- 東京に帰るとき、それと知らされずに精神病院に連れて行かれる(根岸病院)、王子脳病院に転院してマラリア発熱療法を受ける。血液は自分のものであるとあって礼を要求する。少しのことで看護人に制裁されるので、脱走と告訴を考える

# 幻覚の始まり(根岸病院)

- 「ある日私は高熱になりました。その際しきりに壁や天井の動揺するのを認めました。はて変だなあと思っている中に、そこの窓に忽ち水簾がかかり、それに太陽の光線のため五彩六彩と色光が燐爛とするのであります。そこへ金の亀が三匹??して上下するのです。その光彩の美麗なる事、実に筆舌に及ばぬほどです。次に神々たちはおのおのの服装にて色々の動物に乗って私に見舞いに来て呉れました。そして靈空蔵菩薩が〇〇〇の乗り(?)になってきた八木の乳をしぼって私に二杯飲ませて呉れました。そしてその八木を焼いて壺に入れて私に呉れました。それから天井に色々の彫刻が現れるのです。それは海の???魚介類、法華経中の仏達、私の家族の姿、老後の姿、滝の流れ、海水三種の神器、その他の彫刻であります。」

# 幻視 幻聴 水簾に金の亀 根岸病院在院中の 幻象

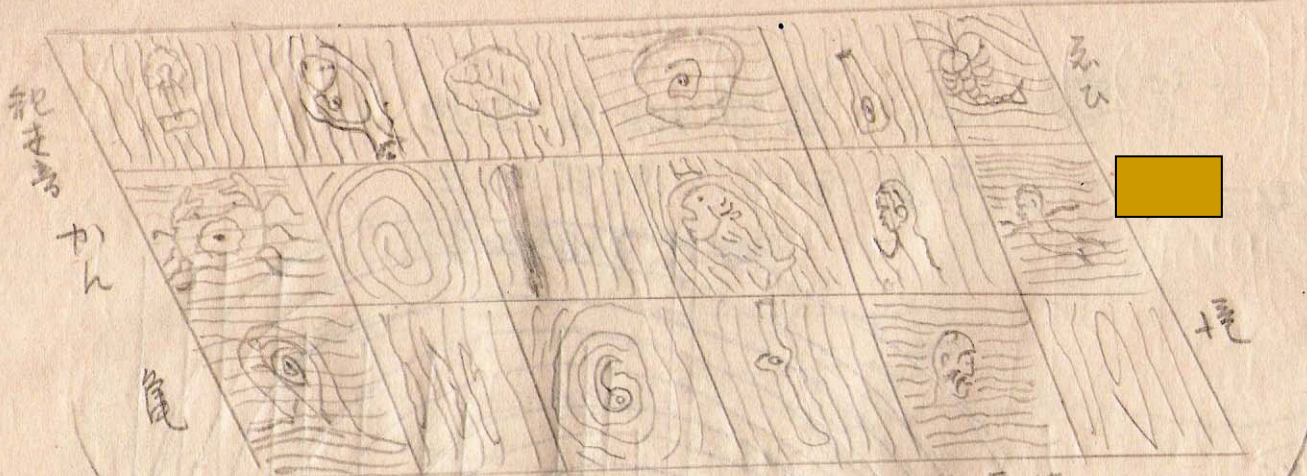


神々の見舞い

八木の乳 八木の黒  
焼き



松山寺院中の幻象  
天井の彫刻



徳利  
壺  
目達  
釣  
タイ  
勾玉  
鏡

図

天井の彫刻 えび、ハマグリ、タイ、ひらめ、かに等の魚介類、水中に人形の部分には著者の苗字が記されており、海で遭難した父親？



# 「靈空蔵菩薩」の声の幻聴

- 「ラジオ的な声」が耳梁に響く
- 「靈空蔵菩薩がある寺に行った、ところがその寺の僧は靈空蔵を中に入れないというのだそうです。それで菩薩はどうして入れないのかといったらお前は変な顔しているから駄目だというのであります。それで菩薩は何この野郎ぶんなぐるぞといったら、よしぶんなぐれ、俺もお前をぶんなぐるといったので、菩薩はぶんなぐったところ、先方もまたぶんなぐって、二人とも大笑いして仲直りし、茶を馳走になって帰ったというのです」
- かくして私は靈空蔵菩薩のラジオ的な談話と悪戯や笑い話によって少しも退屈はありませんでした。

# 靈空藏菩薩の 「二つの光」

マツ毛は夜、灯火の要を  
なすと 先端は玉の如く  
太し

光





# 二つの光・宇宙の真理・優生学

- 私は在院中ある夜十二時に靈空蔵菩薩より光を二個授けられました。そしてこれが何を意味するかを考えたのです。そして夜明けの午前六時にこれを解決いたしました。それは宇宙の真理を示す暗示であるのです。すなわち宇宙は光と光の混合によって生まれ化育し(?)発達繁栄するのです。されば人類もまたこの理に従えば発展幸福となり、これに反すれば不幸絶滅となるのは明らかな事です。たとえば良種があるとします。しかしてこの良種を良種と交配したら、いかなる結果を生じるか、これは議論の余地はありません。必ずやより以上の良種が生ずることは、今日何人も承認するところであります。(中略) されば人類においても、この理によって優生学の学説が立てられるのであります(?) されば人類もその配合においては絶対的に神身[ママ]健令無病息災なる甲と乙を配合すべきであります。決して神身耗弱者、精神病など(?)悪疾所有者、悪癖等のものには断然結婚をさせぬということです。そして矯正治療の見込みのないものには国家の一の鑑定所を設けてこれが鑑定をなし、その状態によって多少一定の期間を考慮して、これを或いは国家において治療をなし、または見込みのないものは断然??でも断行するというようにしてしまうというのです。実に気の弱いやつや偽道德家などは過激の論として反対するかもしれませんが、しかし、何事にも改良??犠牲を払うことは当然であります。

# 「末法」を待ち望む

- 「末法とはなんでありませうか。すなわち人類発達して神の如くなり、そして法の末です。すなわち法がいらんというのです。人みな菩薩の位にのぼり悪人なく悪癖なく偉人なく愚人なく賢愚平等にしてここに極楽浄土が現出するという意味であります。それは勿論日出づるところの我が大日本帝国によりて人間を世界に拡大することは論を俟ちませぬ。日は東より出で西に傾くということは我が日蓮大聖人の開頭の大獅子吼であります。」

# 「金銭」の排除

- 「そして古来世界のもっとも邪魔にして害毒を人類世界に流したものはなんでありましょうか。それがいうまでもなき金銭という阿？物です。これは人間の欲心によって生じたる阿？物であって、今日末法の世では流通の必要のないものであります。禽鳥は耕さずして生存し鶴は千年亀は万年といえます。彼らは金銭を持っていますか。それに神と同等の人間は何事でありましょうか。金銭という有害不要の阿？物をもちて首くり情死・身投げ・人殺し、実に悲惨な？害毒を流しているのであります。ゆえにこれらを除外して生活するこそ人類の幸福であり天理であり天の恵みを充足感謝して頂戴することができる。ここに極楽浄土の建設となります。」

# 「星の世界」の征服

- 「星の世界の征服は、私は入院なれば、弟や兄または義弟などがこれをなし、六月いっばいまで六百五十開拓したというのです。(中略)そしてその住民は深夜密かに化学的応用によって星の世界に送ったというのです。そして私の考案の服装は、皮の乗馬服、???帽、銃器は望遠鏡の形をしてその底や周囲はおのおの化学的応用の???、小型銃、鋭利なるのこぎり、針、そして日本刀、ピストル、双眼鏡など携帯です。」



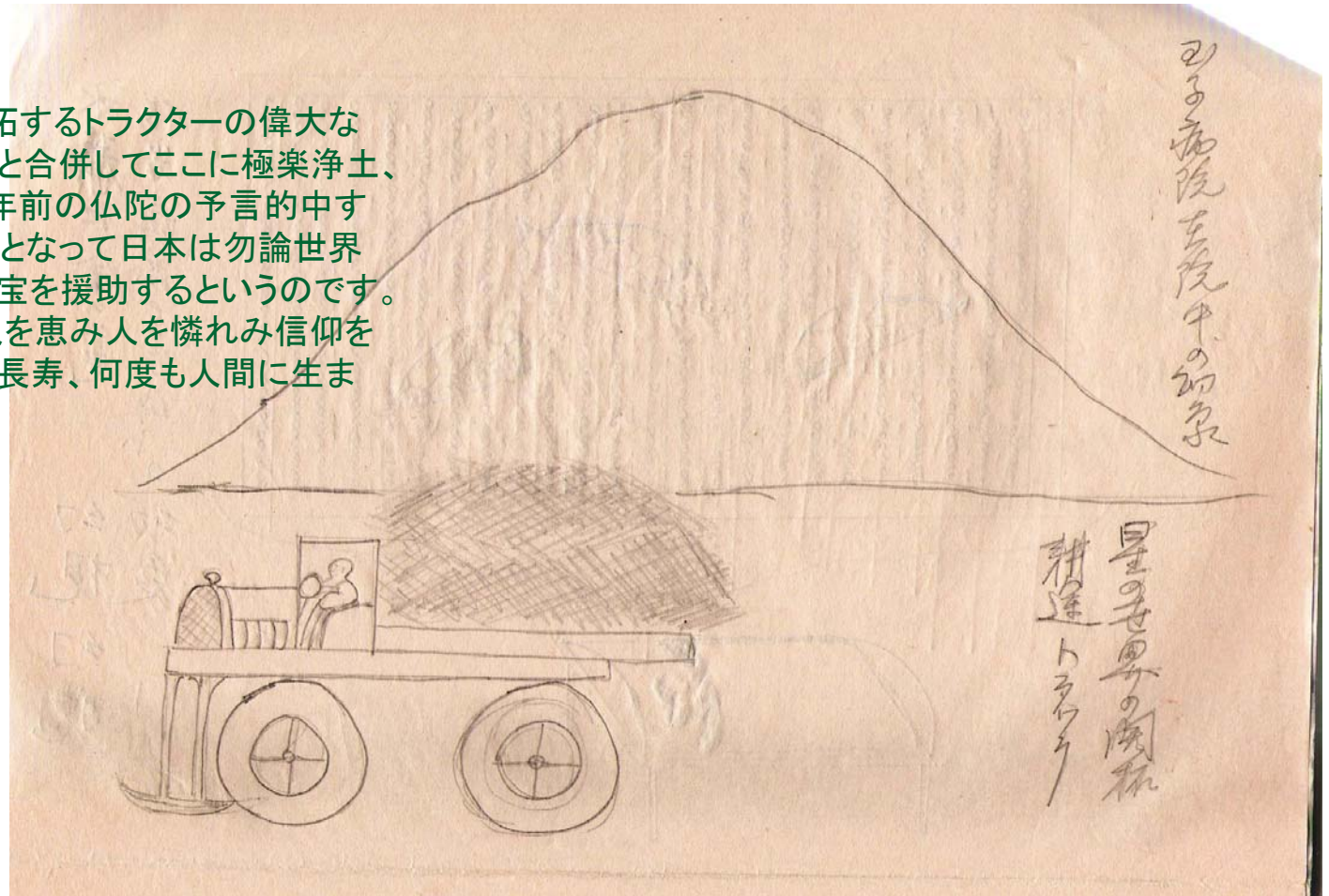
# 星の世界の住人と動物



土星は人類少なく皆金髪長髯、身体また金色、丈高く健康の老人のみ多いというのです。そこには水簾かかり、実に美麗にして涼味あり、諸動物は地球と同一なるもその形大にして狼のごときも性温順にしてよく家畜なるをもって、かつ食用に供せらると。ただし飼育は困難。

# 「星の世界」の開拓

「それから星の世界を開拓するトラクターの偉大なること、そして世界と日本と合併してここに極楽浄土、四海皆妙法となり、三千年前の仏陀の予言的中する。私は星の世界の大臣となって日本は勿論世界にその多量なる食料と財宝を援助するというのです。そして人皆菩薩となり、人を恵み人を憐れみ信仰を励み忠君憐民となり生命長寿、何度も人間に生まれ変わるといのです。」



# 身体の「修理」

- 「そしてここに来てから、兼ねて根岸病院にいるとき、掃除や修理にかかった頭脳、眼球、身体等は出来上がり、四月下旬までかかったようです。いまそのやり方や構造修理のことを??すれば、右の別紙の通りであります。この頭脳、眼球に??日数は約八十日、人員六十人、唾液八リットル(?)、神々たちの名前も聞きましたが、当時筆記しておいた紙を皆捨てられてしまって、人々は記憶がありません。何しろ多数でありますから。(中略)身長は二寸伸び、手の格好や爪の格好をマッサージで変更してもらいました。」



「使用物質唾液 8リットル 朝嘔吐

設置時間6時間 夜中  
12時より午前7時まで

治療器設置」





「修理箇所 虹彩と眼窩

小脳・大脳・中脳・小脳

神経 延髄に連なる物質 マンボー鯨のドイカ、鯨の身

壁設置

軟硬質 眼輪の甲 回転する(時間の記録)

軟硬質 眼輪の乙 固定す」

# 「覚醒」1

- 「しかるに五月上旬以来、私は一切幻象を見ず幻聴を効かず、今までの幻影は跡形もなく一抹の美麗雄大なる大夢と化して、一片の影も止めません。私は今この夢を見たことを愉快に感じます。他の多くの患者はあるいは泣きあるいは怒りあるいは笑いあるいは独語あるいは黙居、実に悲惨極まりなき状態であります。一人私は美麗雄大なる幻象幻聴を見聞きして恐ろしきものは見ず靈虚空菩薩の面白き笑い話を聞いて・・・おります。」

# 「覚醒」2

- 「いまや私は大夢も醒め、素の素寒貧となりましたが、しかし絶大の幸福と愉快を感じる者であります。身体の重量は月とともに増加し頭脳もいささかの痛痒も感ぜず朝起床より晩の？？？までも読書しても少しの疲労も覚えません。日々健康術一分間療法、乾、水摩擦、朝晩？？？拭き掃除などを手伝っても何の疲労も覚えず、日誌をつけ原稿を書き新聞も時々見る。そして妻子は時々面会にきて菓子を生産に持ってくる。多少でも小遣いを置いていく。また郷里の妹は来て沢山の菓子、単衣、そのほか金三円の間食代などを貰え、また老母と姪甥が郷里より面会にきて沢山の氷砂糖と金四円を置かれました。(中略)されば私は病身なるも絶大の幸福と希望を以って日々健康と栄養に留意して一日も早く退院して比類なき活動を開始せんと健康術にも励んでいる次第であります。それは頭脳、身体、体温、便通、脈拍等の狂いもなく舞い地に歓喜と感動の日を送る状態であります。ここにおいて、昔日の地獄も極楽となり実に愉快きわまりなきことです。」

# 解釈1 — 精神病院の中に作られたプ ライヴェートな世界

- 幻覚・妄想を当時の「現実の」状況と結びつけることは可能だが、この方向の解釈は不毛ではなからうか？
- 幻覚は患者Kの「私的な」ものであった
- 「かくして私は靈空蔵菩薩のラヂヲ的な談話と悪戯や笑い話によって少しも退屈はありませんでした。しかし私はそれがため独笑したり独語したりすることは絶対にありませんでした」
- 「決して外には出さず、心で笑っております。自制的能力もあります。されば独語もせず、況や泣き悲しみ怒り苦しむ等は一言もいたしませんことをここに誇りとす、天帝に感謝するものであります」

## 解釈2 — 精神医学の「悔改め」要求 に対する対抗言説？

- OBHのカルテには、「病識」とともに病気時代の行動を反省する圧力の例が多くある
- Sの例(昭和13年4月3日 — 6月23日、38歳男性)
- 4・25 口先では神妙なことを言う。自分では本当に我侷であったと思う。今度はどんなことでも我慢できると思うなどというが、真実の腹の中を見せているとは受け取れぬ。 5・16 態度謙遜にして医師に対する応接はよし。今後絶対に禁酒する。 5. 23 過去を反省して申し訳ないと思い、妻にも謝ったと涙ぐんで話す。



# 精神病の病識と悔改め

## もう一つの例

- Mの例(昭和9年6月5日 — 昭和10年10月10日 66歳男性)
- 6月5日 「ここへ来る前、妻が計画的に自分にゴミを掃きかけた。妻は元来不貞であるから、長男が生まれた当時別れようと思った。頭の一つくらい殴ることはあるが、それ以上の事をしたことは無い。」
- 9月26日 「入院当時と較べると、何となく落ち着いて、心静かになってきた様に思う」「先生に勝手なことを申し上げてすみません」10月10日 「一日も早く退院したい。今後は家庭へ帰ってもかなり円満のように心掛けています。」10月22日 入院させられた目的は何だと思うか？ 「神経衰弱のためと思う。」12月29日 「妻に対しての妄想は、思い違いであったと思う。」昭和10年6月10日 面会無いので寂しい。余程家人をてこずらせたのではないか？ そういう覚えはないが、そう感じたかもしれない。

# 肯定される経験としての幻覚

- 家人や親類に迷惑をかけたことを反省する節もあるが、幻覚を歓迎し、それを経験したことを喜んでいる。
- 「高い強度の想像力」によって、幻覚が現れる前の記述にある「廃人同様」「惨めな姿」という自己意識から脱却
- 医者側の観察は？

# 筆記する空間としての精神病院

- 医者・看護サイドが患者に関して作成する膨大な記録 — 病床日誌、看護日誌
- この記録の影響は「痴人の夢物語」にも現れている — 「日誌」をつけること、体重や便通の記録など
- 別の患者の例 — 患者A(女性、昭和4年—16年)の「日誌」
- 8.1.27 他患者に菓子をいただき、ひとつばかりいただいてはいちいち日記に書かなくてはならない、やりきれないなどと申し、ちり紙にかきおらる 8. 1.30 他患者の買い物などを日記にかきおる 8. 4.6 これは何回便所にいったかななどと聞く 他患者の動作を眺めてはさまざまなことを書く 8. 6.28他の患者の姓名などをきいて日記に書いている 8. 8.18 終日古新聞を見て自分の想像していること、記憶していることを読むがごとく話つづける 8.10.11 ちりがみに日常のことを書く 9. 3.18 他の患者の食事をきいて日記に書く



# まとめ

- 患者にとって精神病院は、「書かれる」と同時に「書く」空間でもあった。
- 医療に起源を持つ患者の記録は、医学の知/権力に影響されながら、それと対抗する自己を生み出していた。
- 個人の世界の中の「想像力」が、この自己成型において重要な役割を果たしていた。
- 「病と物語」は、書くことと書かれることのせめぎあいに光を当てる視角である。